

## 「公園デビュー - コ - チ制度 ( ? )」

ある障害児・者関係の公共機関主催の「重症児が地域で生活するために」をテーマのシンポジウムのコーディネーターを担当した。企画側の意図は、「様々なニーズに対応出来るサポートのためには、どのような社会資源やネットワークが必要か」であった。シンポジウムでも少し触れたが「地域で生活するため」ということには、私なりに、いつも以下の一つの想いがある。ご意見をお聞かせください。

「地域」で「生活」するには、例えば、母親が公園デビュー(象徴的な表現で、医師からの宣告の戸惑いから、子どもと共に地域生活にポジティブになるという意味合い)できるまで、共に公園へ寄り添うコチ制度を整備することの方が大切でないかなと思います。また、公園にいる周りの母親達にも、こうした親への係わり方を時にアドバイスすることも、必要でしょう。つまり、地域の方々にも理解を促すことも出来ます。それこそが、地域の方々も障害児と共に「地域」で「生活」ということに、繋がると思います。

障害者が勤務し始めると、何ヶ月間か共に通勤し、企業側と本人にアドバイスする「ジョブコチ制度」は既にありますので、こうした障害児の「(仮称)公園デビューコチ制度」も可能な気がします。

現に、地域の公園デビューまで、かなりの時間と勇気が必要だったという母親の話も聞いたことがあります。かといって、障害児の母親へという目だけでのサポートだけでは困りません。ある障害の親は、家にかかってくるセルルの電話の時、自分が障害児をもつ親とは知られず「一人の大人として会話できるので、ほっとする」という話も聞いたことがあります。また、養護学校に通っているために、地域の子ども会の名簿に記載されておらず、子ども会の行事に声もかからず、更に、地域の小学校のプールも使用させてもらえないこともあったとか。

まず、障害児療育のゴールとしての専門知識・技術でのサポートや既存の制度等の説明以前に、まず、母親の不安、戸惑い、願い等に寄り添うことが大切だと思います。こうした支援に向くコチは、障害児をもった親の心理過程を理解し、かなりしっかりした人間性も要求されます。こうしたコチの研修を担うことこそ、シンポを企画したような機関の役割とも思います。

もちろん、障害のあることを最初に宣告する医療機関(医師) 保健所(保健師) 地域支援機関(公園デビューコチ)というように、サポートのための連携の構築を含めたものであることは、いうまでもありません。